

続五重相伝（親から子へ、子から孫へ受けつがれること）

松林寺では来春、五重相伝を開筵（かいえん）いたします。この五重相伝で相伝されるものこそ浄土宗の檀信徒として必要な安心（あんじん・確立した信仰心）であり、お念仏の教えの真髄を親も子も孫もご先祖様から続く各世代が、時代は移り変われども同じ菩提寺の本堂で、それぞれの時代に即応しながらの説法によって相伝されてきたのです。

さて、右の文章は実は昨夏の『あみたあばあ』の一部です。一般的な五重相伝の説明として述べたのですが、あえて皆様の心の内に踏み込まない内容であることも事実です。そのためではないでしょうが、五重相伝の申し込みも始まり、いろいろなご質問を頂くようになって参りました。そこで、「平成22年五重相伝」への私の思いを少し述べさせていただきます。

近頃感じることは、日本はどうなるのだろうかという社会に対する不安です。高度経済成長期に育った私は、いろいろ逆風が吹いたにせよ有為曲折を経て、未来は薔薇色に輝くだろうという楽観主義に染まった世代であったことに今更ながらに気づかされ、認識の甘さを反省しています。

日々高校で生徒たちを見ても、卒業後4年余りしてやって来る教育実習生たちを見ても、はつきりとひと昔前に比べて知識量だけでなく精神的な成長が遅れていることを実感させられます。

以前なら大人になることに背伸びをしたがる高校生と大人になる準備ができた大学4年生であったのが、見かけの程はともかく中身の程は大人には程遠いという今日の状況は、大学時代、表面的に本の中だけだと思っただけドイツの哲学者ニーチエの「未来に人間がどんどん小さくなっていく」という警句が正鵠を射ていたことを、本当にこの身で実感する日が来たのかも知れません。

かつて私が大人にあこがれた頃、大人は豊富な経験と知識を持ち、威厳と権威を感じさせる存在で

した。自分自身が大人をめざして近づこうとすると、逃げ水のように本当の大人は遠ざかり、いくつになっても自分を大人と言い切る自信のない未熟な思いがつきまといまいます。つまり私も小さくなっているのです。しかし、これが私にとって「凡夫（ぼんぷ）」の自覚なら、それならそれで積極的に「よし」と肯定できる思いもあります。

平安時代末期、今日同様の社会不安の中で人間は小さくなり、宗祖法然上人は、口で南無阿弥陀仏と称えるだけという徹底した易行（いぎよう・たやすい簡単な修行）で、死後、阿弥陀仏の西方極楽浄土に往生できるとお説きになりました。

なぜ易行なのかといえば「凡夫」にとって、難しい修行は無理でもお念仏ならばできるとお考えになったからでしょう。仏教は修行についてお釈迦様がお説きになった苦行にも放逸にも偏らない「中道の教え」を基本とする宗教です。お念仏は正に中道の教えに適う易行です。

たとえば、私の学校では、生徒たちがお家の宗教や宗派に関わりなく合掌し『一枚起請文』を奉読し「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えます。それは心を育てる役割を果たしています。

ところで、世界を見ても国内を見てもさまざまな宗教が紛争や事件の原因となっている厳しい現実があります。漠然と宗教に対するアレルギーをお感じの方もおいでかもしれませんし、オウム真理教の事件もありました。修行・相伝・儀式という言葉にさえ漠然とした不安を抱かれる方もおられるかもしれません。しかし、心の内の聖なる領域という宗教的な部分を欠落して人間は果たして正しく行動し生きていけるのでしょうか。

「平成22年五重相伝」は、信仰によって安心してより豊かな人生を送るために、偏らない易行として、また生き方の物差しとしてのお念仏の心をお伝えしたいと願っております。



あみたあばあ

あみたあばあ



No.26



浄土宗 松林寺

<http://syourinji.com>

